

C O L L E C T I O N E X H I B I T I O N

生誕・結成記念特集

新収蔵作品展

Birth and Formation Celebration
Special Collection /
New Collection Exhibit



奥田元米（曹山日叟）
1907年 広島県立美術館蔵

冬の所蔵作品展

2023 2/14 Tue ▶ 4/23 Sun

【開館時間】9:00～17:00（～3月31日の金曜日は19:00まで、4月1日～の金曜日は20:00まで閉館）※入場は閉館の30分前まで

【休館日】月曜日（ただし4/17は開館）

【入館料】一般510(410)円／大学生310(250)円 ※（ ）内は20名以上の団体

【縮景園共通券】一般610円／大学生350円 ※特別展は別料金

※高校生以下無料 ※当館で画像中の特別観覧券にて無料でご覧いただけます。

※障害者手帳をお持ちの方や65才以上の方、県内の大学に在学する留学生の方などは無料（1階総合受付でお申し出ください）。



広島県立美術館
Hiroshima Prefectural Art Museum

2階展示室

〒730-0814 広島県中区上緑町1-21
TEL:082-224-8250 FAX:082-225-1444

<https://www.hpam.jp/>



【概要】

冬の所蔵作品展 生誕・結成記念特集／新収蔵作品展

今期の所蔵作品展では、「ウェルカムギャラリー」と「生誕・結成特集」、「新収蔵作品展」の3本立てで、当館コレクションを紹介いたします。

まず、リニューアルオープン25周年を機に開設した「ウェルカムギャラリー」では広島ゆかりの代表的作家を取りそろえ、作品を展示替えしながら皆さまをお迎えます。

続く4つの展示室では、第1室ではドイツ表現主義のグループのひとつである「青騎士」の年刊誌刊行110年を記念して関連する作家たちの作品を、第2室では洋画家たちのグループ「新人画会」の結成80年を機に創立会員たちの作品を、第3室では広島県三次市出身の日本画家、奥田元宋の生誕110年を記念して元宋と師や同門作家たちの作品を紹介いたします。また、第4室では今年度御寄贈いただいた日本洋画と日本画、工芸などの作品や資料を披露いたします。

会期中には、ギャラリートークや対話型鑑賞会、インスタグラムのライブ配信といった関連イベントも開催して、さまざまな角度から当館コレクションの魅力を発信します。

当館は新型コロナウイルス感染拡大防止策を施して皆様をお迎えますので、御理解と御協力をお願いいたします。御来館のたびに新しい美の魅力を発見し、心とんでいただける展示をめざし、今後も努力を重ねてまいります。今期の所蔵作品展をお楽しみください。

【第1展示室】『青騎士』刊行110年 カンディンスキーとドイツの芸術家たち

20世紀初頭の重要な美術運動、ドイツ表現主義のグループのひとつである「青騎士」の年刊誌刊行110年を記念し、関連する作家たちの作品を紹介いたします。

第一次世界大戦勃発前の1912年、ドイツにおける芸術の中心地ミュンヘンで、前衛芸術家たちの手による一冊の芸術書、年刊誌『青騎士』が刊行されました。同書の理念を共有する仲間が集い、展覧会も行われますが、一連の活動の中心にいたのが、今日、抽象絵画の創始者の一人と目される画家ワシリー・カンディンスキーです。外界の再現でなく精神の表現を目指した彼の芸術は、「青騎士」の活動の中で発展していきました。

カンディンスキーの版画集《小さな世界》には、画家が青騎士の時代に確立させた、色や形が激しくほとぼしる表現主義的な抽象画の作風を見ることができます。さらに今回の展示では、後に青騎士に加わったパウル・クレーの《ある音楽家のための楽譜》、ライオネル・ファイニンガーの《海辺の夕暮》、先行するドイツ表現主義のグループ「ブリュッケ（橋）」に参加したエーリッヒ・ヘッケルの《木彫のある静物》も合わせて御覧いただけます。勢いのある筆致や色彩から、新たな表現を目指した、当時のドイツの芸術家たちの熱気が感じられるでしょう。

1914年、第一次世界大戦の勃発により、青騎士の活動には終止符が打たれました。しかし、抽象へと向かう美術の新時代を果敢に切り拓いた彼らの挑戦は、後世に引き継がれ、今日まで繋がっています。



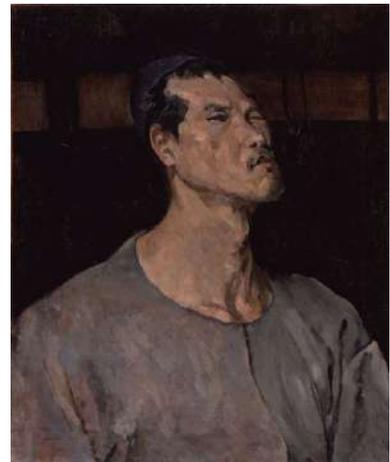
ワシリー・カンディンスキー《小さな世界》
1922年

【第2展示室】^{あい みつ} 靄光と新人画会の作家たち—戦時下の創作と交友

1943(昭和18)年春、日本洋画史において、今なお注目を集めるグループ「新人画会」が、東京・銀座で第1回展を開催しました。靄光をはじめ8人の結成メンバーは、これに先立つ昭和初期頃、絵画研究所や友人を介して知り合い、交友を深めつつ自らの方向性を模索していきます。やがて独自の画風を見出し、飛躍を遂げた彼らが戦時下に創立した同会は、戦局の悪化により創作活動そのものが困難となる中、翌年にかけて三度の展覧会を開催しました。

このたびの特集は、新人画会の結成80年を機に、創立会員である靄光^{あ そう きぶ ろう}、麻生三郎^{いの う え ち ょ う さぶ ろ う}、井上長三郎^{お お の こ ろ う}、大野五郎^{つ る お か ま さ}、鶴岡政男^{お て ら だ ま さ あ き}、寺田政明^{ま つ も と し ゅ ん す け}、松本竣介^{まつ も と し ゅ ん す け}の作品を紹介するものです。同展の出品作の多くは、戦中戦後の混乱を経て散逸しましたが、鮮やかな色彩を用いて画風の新たな方向性を伝える靄光の《海》や、時代の雰囲気の色濃く反映した寺田の《さかな(悲哀)》などの稀少な現存作により、重苦しい時代の閉塞感を創造的なエネルギーに転換する、真摯で力強い創作姿勢を感じていただけることと思います。

多彩な顔触れが結集した新人画会も、終戦を区切りに会としての活動を終え、靄光や竣介は戦後間もなく早世しますが、残る作家たちは、以後も時代を切り拓く活動をつづけました。同会の意義や存在感を改めて印象づける、彼らの戦後の活躍もあわせて紹介します。



靄光《帽子をかむる自画像》1943年

【第3展示室】生誕110年 奥田元宋—心象の山水

「元宋の赤」と呼ばれる鮮烈な赤を用いた風景画で知られる日本画家・奥田元宋(1912-2003)。

元宋は、広島県の北部、中国地方の中央部に位置する広島県双三郡八幡村(現三次市吉舎町)に生まれました。旧制中学在学中から画家に憧れ、当初は油彩画を学び、やがて上京して遠縁に当たる日本画家・児玉希望^{こ だ ま き ぼう}(1898-1971)の弟子となります。1936(昭和11)年の文展で《三人の女性》が初入選を果たすと、2年後の第2回新文展で《盲女と花》が特選を受賞するなど、主として人物画や花鳥画で日本画家としての地歩を固めました。

しかし、戦争中に疎開のため故郷に戻ったことが転機となります。故郷の風景の美しさを再認識した元宋は、風景画へと画題を転向し、自身を代表する表現を見出しました。

戦後は日展を舞台に活躍。1975(昭和50)年以降からは、「元宋の赤」と評される、赤を基調とする独自の様式を確立し、日本の山河を幽玄に、雄大に描きました。1977(昭和52)年には日展理事長、1984(昭和59)年には文化勲章を受章するなど、日本画家として確固たる地位を築きました。また、宮中歌会始の召人に選ばれるなど、歌人としても知られました。

元宋の生誕110年を記念して、当館が所蔵する奥田元宋作品とともに、師の児玉希望^{み か み は き ぼう}、同門の三上巴峽^{ゆ き ち か う し ん}、行近壮人の作品を紹介します。



奥田元宋《青山白雲》1987年

【第4展示室】新収蔵品紹介

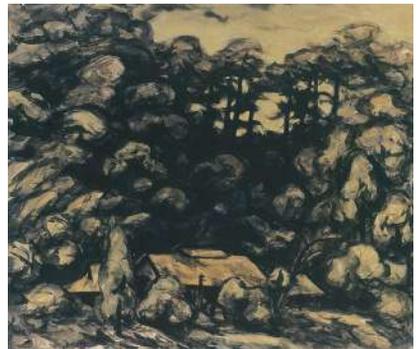
今年度御寄贈いただいた日本洋画と日本画、工芸の作品を中心に紹介します。

日本洋画には、5点の作品が加わりました。広島出身で被爆者でもある神田周三^{かんだしゅうぞう}は、原爆を主題とした作品で知られますが、この度は希少な戦前作を展示します。山路商^{やまじしやう}は戦前期の広島で前衛美術運動のリーダーとして活躍した広島ゆかりの作家です。現在102歳の野見山暁治^{の み やま ぎやう じ}は、渡仏により西洋的な造形感覚を自らのものとし、帰国後は美術団体に所属することなく独自の画業を展開、今日に至っています。

日本画家の児玉希望^{こたまきぼう}は安芸高田市に生まれ、官設の美術展を舞台に活躍。戦後は西洋絵画も積極的に学び、日本画が進むべき道を模索しました。

工芸では、漆芸や金工、陶芸などの作品を新たに収蔵しました。蒔絵の池田泰真^{いけ たいしん}と彫金の清水南山^{しみずなんざん}はともに帝室技芸員を拝命したその道の大家、三代・四代金城一國^{きんじょういつこく}・鯉城政廣^{りじょうまさひろ}は広島を代表する漆芸・高盛絵の作家です。林康夫^{はやしやすお}は戦後いち早く、用途にこだわらない陶芸のオブジェを作り始め、いまなお在野の精神にのっとり制作を続けています。

このほか戦前に広島で開かれた展覧会資料など貴重な資料も受贈しました。



児玉希望《氷川の農家》1957年頃

【ようこそ、ウェルカムギャラリーへ】

リニューアルオープン25周年を記念して、令和3年に新たな展示コーナーとしてウェルカムギャラリーを設けました。当館の顔ともいべき大理石に囲まれた展示室で、当館の成り立ちを紹介する動画とともに、美術への関心の度合いに応じて選べる作品解説を用意しました。みなさまへの歓迎の気持ちと、「多くの方々の美術への誘いとなるように」との願いを込め、この場所を「ウェルカムギャラリー」と命名しました。

ここでは、「これが、県美の広島愛」をテーマに、広島県ゆかりの著名作家である、洋画家の小林千古^{こばやしせんこ}・南薫造^{みなかんと}・観光^{あきみつ}、日本画家の児玉希望^{こたまきぼう}・奥田元宋^{おくだげんそう}・平山郁夫^{ひらやまいくお}、彫刻家の平櫛田中^{ひらしでんちゆう}・圓鍔勝三^{ゐんつばかつさう}、工芸作家の六角紫水^{むつかくしすい}・清水南山^{しみずなんざん}・今井政之^{いまいまさゆき}の作品を一堂に展示します。作家を育んだ広島という地域の特性や、作家の広島への想いを伝えるエピソードと合わせて、当館が誇る名品の数々を御覧ください。

また、1階ロビーでは画家・菅井汲^{すがい ぐみ}が所持したボルシェの展示や、1階図書室では美術をテーマにしたマンガコーナーを設けるなど、多くの方々に美術に親しんでいただく場を用意しています。

美術が好きな方も、これから好きになる方も、どうぞお気軽にお楽しみください。



清水南山《猫金具付 小児用手提》1939年

【関連イベント】

■リレートーク

当館学芸員が各室の見どころをリレー形式で紹介するトークイベントです。(ワイヤレスガイド使用)

日時: 2023年3月24日(金)15:00~15:45

場所: 2階 展示室

講師: 藤崎 綾(当館主任学芸員)、神内 有理(当館主任学芸員)、岡地 智子(当館学芸員)、森 万由子(当館学芸員)

定員: 12名

※要事前申込【Tel.082 221 6246(当館)】

※要入館券。会場入口でお待ちください。

■対話型鑑賞

冬の所蔵作品展に出品中の作品から、学芸員が選んだいくつかの作品をみんなで話しながらか鑑賞します。

(機材や接続環境、Zoomの操作につきましては、各自で準備をお願いします。)

日時: ①2023年4月1日(土)10:00 ②2023年4月8日(土)14:00

ナビゲーター: 森 万由子(当館学芸員)、岡地 智子(当館学芸員)

参加方法: ①オンライン(Zoom) ②2階展示室(ワイヤレスガイド使用)要入館券。会場入り口でお待ちください。

定員: ①6名 要事前申込 以下のフォームからお申し込みください。 ②8名 要事前申込【Tel.082 221 6246(当館)】

申込フォームはこちらから

<https://forms.gle/3DXSEqLm5rWDt3D8>



■インスタライブ配信

閉館後の展示室内からギャラリートークをライブ配信します。(約15分間)

内容: ①日本洋画 ②新収蔵(日本洋画・日本画・工芸) ③日本画 ④西洋美術

日時: ①2023年3月7日(火)17:00~

②2023年3月14日(火)17:00~

③2023年3月28日(火)17:00~

④2023年4月4日(火)17:00~



公式Instagram

講師: ①藤崎 綾(当館主任学芸員) ②各分野学芸員 ③神内 有理(当館主任学芸員) ④森 万由子(当館学芸員)

【媒体掲載用の画像提供について】

※いかなる場合も本プレスリリースからの転用は御遠慮ください。

※都合により出品作品が異なる場合がございます。御了承ください。

※画像については提供が可能です。掲載の際に画像が必要な場合は、当館へお問い合わせください。

※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館まで提出いただき、1週間程度お時間を頂戴いたします。御了承ください。

御来館の皆さまへ

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、以下の対策を行っています。御理解と御協力をお願いします。

■ 次に該当するお客様は、入館を御遠慮ください。

・発熱や、軽度であっても咳・のどの痛みなどの症状があるなど体調の悪い方

■ 協力をお願い

・正しいマスクの着用、手指のアルコール消毒、咳エチケット

・会話は控えめにし、特に大声での会話は行わないでください。

・人と人との接触を避けるため、できるだけ距離を空けてください。

・来館者が多い場合は、入場制限を行う場合がございます。

問い合わせ先

広島県立美術館

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444

E-mail iroeuma2@gmail.com

担当 学芸課 神内 有理

総務課 広報担当 一色 直香、弘津 かおる

— 当館公式SNSはこちらから —

